

神仙沼・大谷地湿原の植生

桑 原 義 晴

後志の日本海に面して、那須火山脈に属

するニセコアンヌプリ(一、三〇八m)、イワオヌプリ(一、一五四m)、ワイヌホルン(一、〇四五m)、チセヌプリ(一、一三五m)などの諸火山がてい立しているこれらの火山は、いずれも新生代第四期にはいつてできた新しい火山であるが、火山に付随して大小いくつもの湖沼や高層湿原が、山麓や山腹まれに頂上にまで点在している。

湖沼や湿原の生成時期や広さ、その他、地形的な位置などの相違によって、それぞれ植物群落の構成種が少しずつ異なっていることは、興味深い。

一方、この地域は景観的にも雄大で、樹間からもれるうす青色にかすんだ積丹半島の遠望、静寂な湖面に映じたアカエゾマツの老木や鹿の子まだらに雪をいだいた山

頂の陰影、湿原を渡る初夏の微風になびくワタスゲの可れんな姿など、訪れる人びとの目を楽しませ、感嘆させずにはおられない。まさに、幽すいの境に遊ぶ感に強くうたれるであろう。

いまから三十余年前は、倶知安から岩内へ向かう狭い道路があったが、このあたりの山道の両側には二mを越えるチシマザサがおい茂っていて、ちょうどトンネルのようになつていた。このような道をくぐり抜けるときは、つねにクマとの出合いに細心の注意を怠らなかつた。事実、山道のまん中にクマの糞や足跡の見られることがしばしばあったからである。しかし、今日では、岩内からこの湿原まで車道が開通して、往時のような寂しさや脅威を感じることは毛頭もなくなった。回顧すると今昔の感を禁じ得ないが、裏を返すと神聖な地

域がそれだけ俗化し、風光明媚な自然が少しずつ破壊されてきたことを意味している。

神仙沼高層湿原

チセヌプリ山麓に近い北東方面に神仙沼高層湿原(海拔約七〇〇m)がある。この湿原の中には大小さまざまな広さの池沼が点在しているが、一番大きいのが神仙沼である。

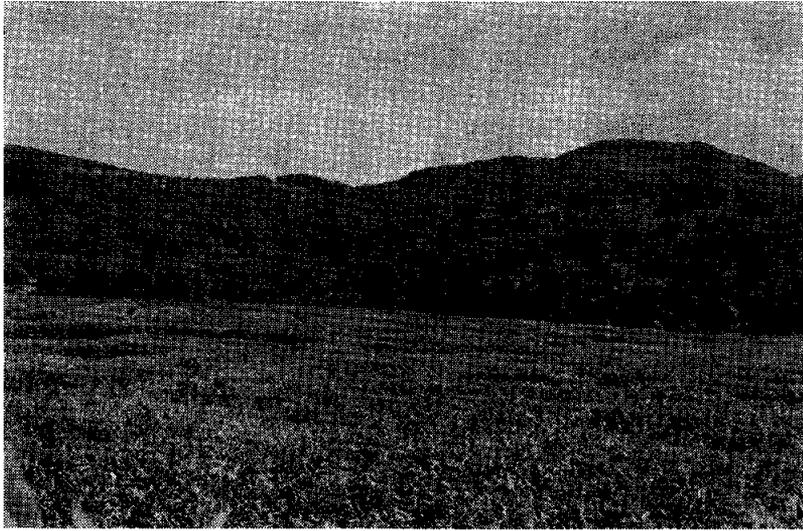
神仙沼は長径一、〇〇〇m近くの楕円形をした沼で、湖底は浅いが水は清く澄み、常時水をたたえている。神仙沼およびその周辺の小さな池沼に生育している植物の種類は比較的少なく、ミツガシワやセキシヨウモ、フトヒルムシロ、ネムロコウホネ、クロヌマハリイなどが、ところどころに小群落をつくっているに過ぎない。しかし、

ネムロコウホネの生育地は後志地方ではここだけで、他の湖沼には見られない。

沼の周辺には、アカエゾマツとダケカンバの混生した原始林がむかしの面影をそのままとどめており、林床にハイマツを伴っている。館脇 操博士は、北海道のアカエゾマツ林を林型的に分類し、本湿原の群落は原始型をもつた湿原系の林型とされた。樹形にも、積雪や風向ならびに土壌的な影響によって、さまざまな変化が見られる。

なかでも、からかさ形をした老木の造形美は、人工美の追隨を到底許さない見事なものである。アカエゾマツは、後志地方では羊蹄山の山麓や岩内岳連峰にも散生しているが、群生地としては本林に及ぶものはない。羊蹄山では、樹高二〇mから三〇m近いアカエゾマツをまれに見かけるが、おそらく往時は群生した美林をつくっていたことであろう。

沼をとり巻く湿原には、ツルコケモ、ハイイヌツゲ、チングルマなどのわい小な低木をはじめ、サワギキョウ、イワイチヨウ、コツマトリソウ、モウセンゴケ、ミツバオウレン、ヒオウギアヤメ、トキソウ、エゾゼンテイカ、ヌマガヤ、ミカヅキグサ、オオイヌノハナヒゲ、ホロムイソゲ、ヤチスゲ、カワズスゲ、ワタスゲ、ヒメシダ、ミズゴケなどのわい性草本や群類が生育し



後志共和町大谷地湿原 (1967.7.) フサスギナの産地として知られている

ている七月中旬は、ちょうど開花期で、湿原の景観のもっとも美しい季節である。

チングルマは、普通、高山帯の日当りのよいところに生育するが、後志地方では羊蹄山に産しない。また、ニセコアンヌプリにも見当たらないようであるが、イワオヌブ

リには、わずかに生育しているところがあ

る。しかし、本湿原のような比較的広い群

落はつくっていない。

湿原に点在する池沼について、地学的に

大谷地湿原

イワオヌプリ山麓の

西北方の位置に、「大沼」と称するかなり大きい沼がある。この大沼から西北方約二㎞隔

て、やや広い湿原に到達する。これが大谷地湿原(海拔七三・八m)

で前述の神仙沼とは指呼の間にあり広さは約一・五㎞四方である。

この湿原のおもな特徴として、高層湿原の指標となっているミズゴケがほとんど生育し

ていないこと、写真に

見られるように、草丈一m前後のチシマザサが周辺から侵入していること、低層湿原に優占するヨシが多いこと、また、土壌も粘土質に富んでいることなどが上げられる。このような様相から、生成時期の非常に古い、つまり遷移のかなり進行した湿原であることが想像される。

この湿原は以前から、わが国唯一のフサスギナの群生地として知られていた。最近、北見の置戸においてもフサスギナが発見されたが、群落の規模においては本群落の比ではない。

いまから一〇年くらい前、共和村(現在共和町)で、この湿原に、かんがい用のダムを建設する計画を申請したことがあったが、関係者の努力によって中止された。事前に現地調査が行われたが、そのとき理事者側から「フサスギナを他の湿原に移植したかどうか」という提案があった。これに対して私は、「植物は、元来、その生育環境と密接な関係があるものであるから、植物だけを引き離して、よそへ移植しても成り功しないであろう」と意見を述べた。

フサスギナは、ミズゴケのはえていないやや乾燥した粘土質の土壌に生育しているが、湿原の周辺からチシマザサが徐々に侵入してくるので、しばしばササとせり合いがおこる。しかし、生活力のおう盛なササ

に対しては、とても打ちができないので、路傍のササを刈り取った跡に進出して群落をつくることが多い。

本種は、夏緑性の半ば日陰を好むシダ植物で、草丈三〇—五〇cm、スギナによく似ているが、スギナよりも枝が繊細でしかも密に分枝し、枝の上半はやや下垂する。茎

は地下茎と地上茎に分かれ、地上茎はさらに胞子茎と栄養茎に分化しているが、両者はほとんど区別がつかない。ただ、胞子茎は融雪直後には枝がなく、その先端に一—二cmの胞子のう穂がついているので識別

される。胞子のう穂は、五月下旬から六月上旬にかけて成熟する。胞子のうが成熟したのちには、枝を密に出して栄養茎と同一形態になる。霜にはきわめて弱く、九月中旬頃には地上部はすっかり枯れてしまう。地下茎は地表から五—六cmのところを長く横走し、越冬芽を地中につける。

フサスギナは、わが国では、北海道だけに分布している固有種であるが、世界的にみると、樺太、朝鮮北部、中共北部、シベリア、北米、ヨーロッパ北部などの温帯ないし亜寒帯地方に分布している。地質時代にはよく栄え、広く分布していたものであるが、その後次第に衰退の方向をたどり、飛び飛びに分布(隔離分布)するようになったものと推察される。

このようにフサスギナは、いわば隠とん者のような生活をしているもので、自然界ではきわめて弱い立場に置かれている。したがって人間の手で保護・保存に努めなければ、将来、絶滅してしまうおそれがある。保護・保存対策の一つは、ササの侵入に対処してどうするかということである。もう一つは人間の踏み付けをどう防ぐかということである。最近、岩内から蘭越方面へ抜ける新しい車道ができたが、この車道はちょうど湿原の西側を横切っているので、観光客は随時下車して湿原を迫りようできるようにした。したがって、多かれ少なかれ人為的影響は免れない。

フサスギナに関する記事が意外に長くなつたが、この湿原一帯にはフサスギナのほか、ヨシ、ヒオウギアヤメ、ナガボノシロワレモコウ、シナノキンバイ、エゾノリュウキンカ、エゾゼンテイカなどの群生が見られる。七月中旬になると、シナノキンバイ、ヒオウギアヤメ、エゾゼンテイカなどの花が咲き乱れ、人里を遠く離れたこの湿原は美しく飾られる。そのほか、ハクサンチドリ、カラマツソウ、オオバタチツボスミレ、バイケイソウ、コバイケイソウ、エゾノサワアザミ、エゾシロネ、ザゼンソウ、ミズバショウ、エゾオヤマリンドウ、サワギキョウ、サドスゲ、ミタケスゲ、ハ

クサンスゲ、オオカサスゲなどの混生した群落も見られる。

上記のように、この湿原には面積の割合に多数の湿生植物が含まれているが、神仙沼湿原の植生とは構成種が多少異なっていて、チングルマやワタスゲ、ヌマガヤなどは見られない。なお、イワオヌプリ連峰の山麓には、阿湿原のほかに小規模の湿原が多数存在していて、それぞれ植生の構成種に多少の違いが見られる。チセヌプリ山頂にわずか一〇m四方の小さな湿原があるが、中心に「三日月沼」と称する池沼があつて水中にフトヒルムシロが生育しており、周辺の湿地にはイワイチョウ、ミツバオウレン、コケモモなどが生育している。そのほかの湿原にはエゾホソイヤヤラメスゲの生育しているところ、あるいはヒメカユウやホロムイソウ、タチギボウシなどの生育しているところがある。しかし、北海道の湿原に普通なヤチヤナギ(エゾヤマモモ)の見られないことが、この地帯の湿原に共通な特徴である。

この湿原の周辺にはアカエゾマツの自生はなく、針葉樹ではトドマツだけである。広葉樹の大部分はダケカンバで、積雪や強風の影響で奇形を呈しているものが多い。

北海道には、俗に「谷地」と称する広い湿原が各地に分布しているが、いずれも湿

潤・寒冷な地方の河川の下流、あるいは湖沼の周辺、高山地帯などに発達している。

これらの湿原は、往時は全く無用の長物として邪魔物扱いにされていたものであるが、近時は開発のやり玉にあげられ、今日もなお開発のほこ先が向けられ、虎視眈々とねらわれている。今日においては湿原を無用の長物扱いにすることは全くもつ体ないことで、大いに利用しなければならぬ。しかし、湿原を改造（破壊）して、ただ単に、せつな的な利潤だけを得ようともくろむならば、それは、かけがえない貴重な湿原の賢明なしかも有効な利用とは言い難い。

この湿原については、湿原に生息する動物の生態学的な研究をはじめ、生態学的遷移・泥炭の形成過程や成因の探究など、生物学的にも地質学的にもまだまだ多くの解明されなければならない問題が残されている。湿原保護の必要性はここにあるわけである。今日まで天然記念物や国立公園に指定された地域は学術的研究の場として、永久に確保しなければならない。

ニセコアンヌプリ山麓の北東に面したところに、やや広い高層湿原（地図にもなく名称もない）があるが、この湿原は中心部から周辺部に向かって遷移の段階（遷移系列）がよく現われている。かつての湖の最

深部と推定されるところが湿原の中心部にあって、ここには約3m深さの水をたたえており、プランクトンや水生群類が浮遊している。水辺にはハクサンスゲが密生しており、少し遠ざかるとホロムイヌゲやツルコケモモ、ミズゴケなどの群落に変わり、さらに湿原の周辺部に近づくと、エゾイソツツジ、ホロムイイチゴ、ヨシ、ヤマドリゼンマイなどの群落に変る。湿原の最外部にはチシマザサやダケカンバの幼樹、マイズルソウなどが侵入していて、陸生植物への移行を示している。

以上に述べた植生の変化を、湖の成生当時から今日のような湿原の形成にいたるまでの長い歳月にわたる遷移（湿生遷移）の過程にあてはめてみると、湿原の中心部のプランクトンや水生群類の浮遊しているところは遷移の初期の段階（始相）、ホロムイヌゲやツルコケモモ、ミズゴケ、ヤマドリゼンマイなどの群生しているところは遷移のさらに進んだ段階（途中相）、チシマザサやダケカンバの幼樹の生育している周辺部は、遷移の相当進行した段階で、さらに湿原をとり囲むダケカンバやチシマザサ、マイズルソウの優占しているところは遷移の最終段階（極相）に達したところ、ということになるであろう。このように一見均質に見える湿原の景観も、子細に観察

すると、遷移途上のさまざまな段階の群集が含まれていることが分かる。

イワオヌブリ火山群に付随した湖沼から湿原を経て森林に移り変わるまでの過程(水生遷移系列)をもっと詳細に、植生だけに着眼してその交替をまとめてみると、おおまかな推測ではあるが、次のようになるであらう。

プランクトンの時代↓水生蘇類の時代↓沈水植物の時代〔セキシヨウモ、クロヌマハリイ〕↓浮葉植物の時代〔ネムロコウホネ、フトヒルムシロ〕↓沼沢植物の時代〔ミツガシワ、エゾホソイ、イワイチヨウハクサンスゲ〕↓湿地草原の時代〔ヨシ(低層湿原)・ヌマガヤ(中間湿原)・ミズゴケ、ツルコケモモ、モウセンゴケ、ホロムイソウ、ワタスゲ、ホロムイソゲ(高層湿原)〕↓半湿地草原の時代〔フサスギナ、ヤマドリゼンマイ、ナガボノシロワレモコウ、ヒオウギアヤメ、エゾゼンテイカ、ヨシ〕↓陸地草原の時代↓森林(落葉広葉樹林)の時代〔ダケカンバ、ミズナラ、チシマザサ、マイズルソウ〕。

遷移系列の中でのフサスギナの位置づけであるが、生育環境から見て、高層湿原に適応した酸性土植物であるとは思われない。むしろ、土壌の酸性度が次第に低下をはじめた半湿地草原の構成種と見なす方が

至当と思う。

フサスギナの生態学的な研究は、まだまだ不明な点が多く、今後、大谷地湿原の地質学的な解明と相まって総合的な学術調査を必要とする。

以上は、湿原に関する諸問題の中の遷移を例として上げたに過ぎないが、湿原は学術上の仮説を実証する場として貴重な自然の文化財であるばかりでなく、無限の知識を学び取ることのできる数方ないし数千方の星霜を経た神秘のなぞがひめられているのである。

〔札幌商業高等学校〕

会誌に掲載された湿原関連の記事

△昭和四十年年度第一次実施視察記▽

38〜45 (一九六六)

辻井達一 草原の遷移に関する考察⑧—四

40〜53 (一九六八)

藤巻裕蔵 ウトナイ湖の水辺の鳥・四、38

〜39 (一九六八)

三宅正紀 泥炭地と農業・七、34〜35 (一九七〇)

九七〇)

斎藤春雄 湿原に想う・十、12〜13 (一九七二)

七二)

藤巻裕蔵、松岡 茂 ウトナイ沼の冬の

水鳥類・十一、20〜22 (一九七三)

青柳正英 サロベツ原野と開発・十三、69

〜73 (一九七五)